

市立

いちかわ

自然博物館だより

令和 5 年(2023年)

8-9月号

(通巻 207号)

2023年度

あたりまえの風景に
あたりまえの生き物に
あたらしいときめきがある！



自然博物館収蔵写真

キツネノマゴ

秋に咲く小さな野草です。可愛らしいピンク色の花を咲かせますが、草丈が低いので、あまり目立ちません。

P1 ☀ いきもの写真館
キツネノマゴ

P2 ☀ 外来生物に関してー3
バスとギル
/ 3

P4 ☀ センサーカメラとっておきをご紹介
サシバさんきょうだい

P5 ☀ 長田谷津のとりたち
アオサギ

P6 ☀ くすのきのあるバス通りから
季節はすれ？

P6 ☀ 展示室 飼育生物の話題
いもむしの展示

P7 ☀ わたしの観察ノート
5～6月の記録

P8 ☀ ご案内

博物館だよりはカラー版をホームページでご覧いただけます。



バスとギル

帰化植物・帰化動物という言葉が外来種・外来生物という言葉に置き換わるきっかけとなったのは、2種類の淡水魚、ブラックバスとブルーギル（バスとギル）です。日本の在来魚を根絶やしにするとしてマスメディアでも大きく取り上げられ、だれもが知る社会問題になったからです。

バス・ギル以前の帰化動物

ブラックバスとブルーギルが広く知られる以前から、人々の身近には帰化動物が存在していました。カダヤシ、ウシガエル、アメリカザリガニ、ミシシippアカミミガメです。これらは現在の「外来種」という言葉を持つマイナスのイメージではなく、むしろ身近な生き物として肯定的に受け止められていました。それは、日本に持ち込まれた理由が「人のため」だったことと無縁ではないかもしれません。

カダヤシは、まだ街のなかに「どぶ」がたくさんあった時代にボウフラを食べさせて退治するために輸入され放されました。国立環境研究所の侵入生物データベース（以下、データベース）によると、日本に持ち込まれたのは1916年や1919年で、1970年以降に各地に放流されたとされています。

ウシガエルは、食用として養殖するために輸入されました。「データベース」では1918年とされています。戦後の食糧難の時代のことを考えれば、このカエルが「食用ガエル」と呼ばれて人々に受け入れられていたことも納得できます。

アメリカザリガニは「データベース」によるとウシガエル養殖の餌として輸入さ

れ、その後ペットとして飼われるようになったそうです。日本に入り込んだのは1927年とされています。かつては「エビガニ」と呼び、子どもたちが自分で捕まえて飼う生き物の代表でした。

ミシシippアカミミガメは「データベース」によるとペット用として1950年代に輸入が始まり、野外では1960年代後半から見つかるようになったとされています。子亀は「みどりがめ」と称して観賞魚店や縁日などで普通に売られていました。大きくなった「みどりがめ」はさほどかわいいわけでもなく、扱いに困って逃がした経験を持つ昭和世代は多いと思います。

このように、古くからいた帰化動物は人々の暮らしに溶け込んだ存在でした。

バス・ギルの登場と社会の反応

ブラックバスが社会問題化した時、多くの人にとっては「どんな魚？」という印象だったと思います。「データベース」によると1925年に釣りや食用で輸入されたとされていますが、リスクも認識されていて、長い間、きちんと管理されていました。全国に広がったのはルアー釣りの対象魚になったからです。特にバブル経済期以降、アウトドア・レジャーを楽しむ人が格段に増え、小学生が新品の釣り竿を持って近所

の池でルアーを投げるような光景が多く見られました。

一方で、ブラックバスが国内の水系に放されることの生態系に及ぼす悪影響を正しく指摘する声も多く、それが「一部のルアー釣り愛好者が在来魚を危機に陥れている」という勧善懲悪的な文脈となり一気に社会問題化しました。このころ、長田谷津にもブラックバスが放されたことがあります（現在はいません）。

ブラックバスが社会問題化し、良くないことだとの理解が深まったころ、もっと悪い存在としてブルーギルが注目されるようになりました。飼いやすく人に慣れるので、都市部ではアメリカザリガニと同じような扱いだったかもしれません。あちこちに面白がって放され、市川市内には、いまだにブルーギルが群れ泳ぐ公園が存在しています。

バス・ギル後のいたちごっこ

イヌ・ネコを中心とした空前のペットブーム、外国産昆虫の生体輸入解禁、水槽や

ろ過器、照明器具など飼育用品の低価格化と通販の充実など、バス・ギル登場以降、さまざまな動物が人々の暮らしに入り込み、そして逃がされるようになりました。軽い気持ちで逃がす場合もあれば、意図（悪意？）を持って逃がす場合もあるでしょう。これ以上の放置が日本の生態系に及ぼす悪影響を考えれば、法律によって管理されるようになったのは必然です。「逃がさない」が当たり前になるまでです。

なお、淡水魚に関しては商業的な要因も挙げておきます。ワタカやゲンゴロウブナ、ハスといった琵琶湖・淀川水系の固有種が、いるはずのない江戸川に住み着いているのは、放流した稚アユに混じっていたからと言われています。

帰化植物に牧草由来の種が多く含まれていることとも共通しますが、食料生産という大きな産業的な取り組みが地域の生態系に及ぼす影響について、どう評価し対応するかはむずかしい問題です。人と自然のかかわりについての問題でもあります。



ブラックバス(オオクチバス)
かつて長田谷津に放されたもの



ブルーギル
水槽での飼育個体



センサーカメラ とおきをご紹介

自然博物館では、長田谷津(大町公園自然観察園)の斜面林内にセンサーカメラ(自動撮影装置)を2か所、設置しています。1か所は人工的に作った水場、もう1か所は「けもの道」です。記録は動画ですが、ここでは静止画像を切り取って紹介していきます。



サシバさんきょうだい

写真は、今年(2023年)の7月26日のものです。カメラの交換に行った時、数羽のカラスが飛び立ち、同時に猛禽も飛び立ったのを目撃しました。離れていたのに種類まではわかりませんでしたが、記録されていたのはサシバの幼鳥、しかも同時に3羽写りました。過去にも2019年の8月5日から7日にかけて写りましたが、この時は1羽です。3羽同時で、しかも、見るからに幼い姿ですから、長田谷津から比較的近い場所に巣があることが推察されます。

長田谷津のとりたち

自然博物館で行っている鳥類調査の記録から
一押しのとりにちをエピソードと共に紹介します。

アオサギ

アオサギは、ユーラシア大陸からアフリカにかけて広く分布する、大型のサギです。日本では、北海道では夏季に、それ以外の地域では年間を通して観察することができます。都市部にも生息していること、大型でよく目に付くことから、鳥に特別の関心がない人にも、よく知られている鳥です。

長田谷津では、アオサギを手が届きそうな距離で観察することができます。湿地の上に作られた園路から人が下りてこないことを理解しているかのように、園路の上にいる人を警戒していない印象です。草刈りのために園路から降りた時はすぐに飛んで逃げたので、人＝安全と思っているわけではないのでしょう。あくまで想像ですが、人がいる位置で、安全なのかを判断しているのかもしれませんが。長田谷津のアオサギはあまりの近さから、お客様から問い合わせをいただくことがあります。よくある問い合わせは「動物園の鳥が逃げている」というものです。すぐ近くにいること、想像以上に大きいことから、野生の鳥とは思えず、動物園から脱走した鳥と思われたようです。人とアオサギの距離が2mくらいのこともあるので、飼われていた鳥と思うのも納得です。

長田谷津でアオサギが食べているもの

長田谷津でアオサギは、様々な動物を捕食しています。爬虫類や両生類、魚類、昆虫、甲殻類など多種多様です。下の写真は長田谷津で撮影した、獲物を捕らえたアオサギです。大物を捕らえた時は、飲み込むまでに数十分かかることもあります。



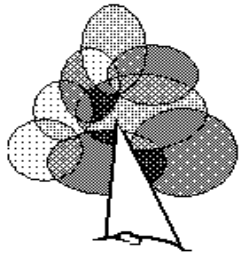
ドジョウ
(2017年6月6日)



フナの仲間
(2019年3月8日)



ウシガエル
(2018年10月8日)



季節はずれ？

今年も猛暑日が続いています。例年と違うのは、毎日ウグイスが鳴いていることです。早春、どこかでウグイスが鳴いていると、「春がくるんだ」とうれしくなります。夏に山歩きをしていると、ウグイスの声が聞こえ、「避暑か、いいな」と思います。ところが、「ホー、ホケキョ」と毎日、近くで、大きな声で鳴かれると…。違う方角からも聞こえ、一羽ではないようです。近所の人に聞いてみると、「真間川沿いで、昭和学院の近くの藪になったお宅で鳴いている」と。

市役所の北側の道を歩いていると、フワフワと直径2～3cmの白い綿毛が飛ん

でいました。ノゲシの仲間の綿毛も飛んでいます。格段に大きさが違います。空き地になった所にアメリカオニアザミがありました。花も咲いていましたが、どんどん綿毛を飛ばしていました。以前、生えていたところは、次の年、その周辺で見かけません。硬いトゲに閉口して、抜かれてしまったのでしょうか。

自然の動植物は、環境や気候の変化に合わせて暮らしを変化させているかもしれません。人間は、環境や気候を「何とかしよう」と思っているかもしれません。でも「今まで通りの暮らしは難しくなるのかな」と考えてしまいました。

(M. M.)

No.50

展示室 飼育生物の話題

いもむしの展示

当館の飼育展示は、市販の飼育ケースを机に置く形が基本です。子どもの手の大きさに見合う生き物を、子どもの手の長さに合った距離感で見せたいからです。時にケースのふたを子どもが開けてしまうくらい無防備です。

さらに、可能な物は露出で飼育します。今夏はいもむしを食草に止まらせ、そのまま並べてみました。葉を食べる口の動きや、時にはパリパリと音まで聞こえてきます。みんな釘付けでした。



アゲハの幼虫と、スズメガ類の幼虫が定番のラインナップです。
アゲハは持ち込みで、スズメガは野外で見つけます。



◆長田谷津より

- ・エゴノキが満開になりました(5/10)。長田谷津では明るい湿地にエゴノキが生えますが、いい環境とは言えず短命に終わります。それでも新しい木が伸びてくるので、毎年どこかで花を咲かせます。

金子謙一(自然博物館)

- ・園路の上にハシブトガラスがいて、しきりに下の水路を気にしていました(5/12)。見ていると水路に降り立ち、アメリカザリガニを捕らえました。
- ・クロオオアリが結婚飛行を行っていました(5/16)。巣から次々と女王アリとオスアリが飛び立っていました。

以上 稲村優一(自然博物館)

- ・アカメガシワが咲き出しました(6/7)。花の少ない時期なので、いろいろな虫が集まるのが楽しみです。
- ・草刈りをしていると、小さなバッタが数えきれないくらい跳びました(6/15)。ツチイナゴの小さな幼虫でした。

◆動物園内より

- ・公民館の実習用にイヌシデの枝を伐ったら、枝先に実が垂れ下がるようになっていました(5/17)。レッサーパンダ舎前の木は低くて実がよくつくので、観察に適しています。

以上 金子謙一

◆真間山より

- ・南側斜面林で、元気いっぱいのミンミンゼミやアブラゼミの鳴き声にまじって、ツクツクボウシの鳴き声をききました(7/26)。連日の猛暑の中、いつもの年より少し早いような印象です。

M. T. さん

◆菅野より

- ・小学校の池にクロスジギンヤンマが来て産卵していました(5/10)。スイレンの葉に止まって、枯れた草の茎に産んでいました。ぐると子どもがとり囲んで見ている、動じずに産卵し続けました。

◆江戸川より

- ・ヨシ原の中でニガクサとシロネが咲いていました(6/28)。ベンケイガニとクロベンケイガニもたくさん見ました。

◆江戸川放水路

- ・干潟にトビハゼを見に行きました(6/21)。干潟をぴよぴよする姿が多く見られました。巣穴は、まだ作り始めの段階のようでした。

以上 金子謙一

◆三番瀬より

- ・満潮になった三番瀬では、堤防にコアジサシがたくさん集まっていました(5/1)。100個体以上確認できました。近くで繁殖するといいいのですが。
- ・干潟で渡り鳥の観察をしていると、海岸線沿いのヨシ原から、哺乳類の叫び声が聞こえてきました(5/11)。しばらく見ていると、2匹のタヌキがヨシ原から飛び出して干潟を走りだしました。喧嘩中なのか、じゃれているのかよくわかりませんが、干潟にタヌキがいる光景は驚きました。

以上 稲村優一(自然博物館)

夏を思わせる暑さの日が多くありました。梅雨入りは例年並みで、雨も良く降りました。6月の初めに、台風の影響の強風が吹き、ナラ枯れの木が倒れました。

ホームページをご利用ください



自然博物館では、市川市域の自然に関する情報や解説を、ホームページ（webサイト）に掲載しています。展示室のパネルよりも、ホームページの方が情報量は格段に多いです。検索で「市川自然博物館」と入力していただき、下に示した画面が出てくれば、それが当館のホームページのトップです（検索1番目を開くと市川市役所のページに誘導されてしまう場合がありますので、その時は検索2番目を開いてみてください）。



ホームページの内容

- ・ご利用案内
- ・展示紹介、詳しい解説
- ・行事案内
- ・自然観察の記録、オリジナル動画
- ・博物館だより、出版物のご案内



＜行事のご案内＞

長田谷津は、
大町公園の自然観察園のもともとの呼び名です。

○長田谷津散策会

（申し込み不要・荒天中止）

季節の風景や動植物を楽しみながら、
ゆっくりと散策します。

集合：動物園券売所前 午前10時

解散：集合と同じ場所で 午前11時30分

○湿地の環境整備をお手伝いして

くださいませんか

（要問合せ・荒天中止）

学芸員と一緒に環境整備作業を行います。
たとえば……湿地の草刈、枯れ枝のかたづけ、
水路の整備、など

集合：観賞植物園 午前10時

解散：集合と同じ場所で 午前12時

初参加の方は・・・

お電話で博物館までお問合せください。

湿地の中に入る作業もありますので作業内容や
身支度などについてご説明します。

	長田谷津散策会		湿地環境整備	
8月	13日	日曜日	おやすみ	
9月	10日	日曜日	24日	日曜日
10月	15日	日曜日	29日	日曜日
11月	12日	日曜日	26日	日曜日
12月	10日	日曜日	24日	日曜日
1月	14日	日曜日	28日	日曜日
2月	11日	日曜日	25日	日曜日
3月	10日	日曜日	24日	日曜日

第36巻 第3号（通巻第207号）

令和5年8月1日 発行

編集・発行/市立市川自然博物館
（市川市教育委員会生涯学習部）

〒272-0801千葉県市川市大町284番地
☎047(339)0477